専修教育2017
no.38

現代社会を生きる高校生の実態とその指導方法

～不登校傾向を持つ生徒への対応を中心に～

［講師］佛教大学教育学部教授、
京都教育大学大学院連合教職実践研究科教授
原 清治

［講演］平成28年12月21日　全国高等専修学校協会／教職員研修会
（東京・アルカディア市ヶ谷）

若者たちの学力、就労、フリーターの問題が私の研究の原点です。子どもたちの学力が、どこで、どのような要因で不振になるのかという問題に対して、関心を持って研究をしてまいりましたところ、いじめの問題に行き着きました。

今日の研修会のキーワードは「不登校」ですが、生徒が不登校になってしまう背景にネット上の問題は大きく関わっています。高校生、あるいは高等専修学校生も例外ではなく、彼らの世代の中におこりうる問題点はどこにあるのかなどを中心にお話しします。

大学の学食にみられる「ぼっち席」

最近、大学で目立ってきている「ぼっち席」について、先生方はご存じでしょうか。例えば、4人掛けのテーブルの中央に衝立（ついたて）があって、正面に座っている人の顔が見えないように工夫されているような席で、独りで食堂に行っても、他者を気にせず食事ができるのが、この「ぼっち席」の特徴です。これが全国へ広まり始めています。

我々が学生だった時代は、相席（あいせき）が普通でした。「どうぞ」と言いながら会話が始まり、情報交換できたこともありました。

しかし、昨今の学生たちは、知っている人間は別として、知らない人間とは話したくないようです。知らない人に気を使いながらご飯を食べるくらいなら、壁に向かってスマホをしながら食べるほうがよほど楽なんですね。完全に自習室のイメージでご飯を食べている大学生が多くなってきたようです。

こういう状況がなぜ大学の現場におこってきているのか。この背景に何があるのか。そこに沿わないと若者たちの「息苦しさ」の感覚がわかりません。

過日、京都・滋賀の高校生を対象にした「ネットいじめ」のデータをとりました。6万6千人という数は、かなり大規模な調査だと自負しています。

スマホはすごい勢いで高校生に普及しました。この調査では、携帯電話、インターネット、スマホの所持率は100.2％です。100％を超えて、一人2台持ちもあるようです。みんなが持っているというつながり方の変化が大きく影響しています。しかし、つながっている様に見えて、深いところでつながりが持てない。つまり非常に「薄い」人間関係でつながっているから、気を使わなければいけない人間には気を使うけれど、使わなくていい相手には知らんぷりという状況があります。

つながる力の希薄さは大人の世界にも

私は、年に何回も小学校、中学校、高校の教員向けに、教員免許の更新講習をやっていますが、その時の大教室が驚くほど静かです。教員同士ですから、お互いに情報交換したりすることが多いのかと思うと、意外に一人ひとりが他者と関わらずに座って講習を受けています。文部科学省をはじめ、子どもたちにつながる力の大切さを説き、つながることを求めることそれ自体は、まったく間違っていないのですが、中・高校生には、それが重荷になっている場合があることも考慮に入れなければなりません。つながる力の強い子、誰とでもすぐに仲良くできる子ばかりでなく、小さい頃から自分はなんとなくコミュニケーション力が弱い、なんとなく友だちをつくるのが下手、そう思う子たちも少なくないのです。その子たちに向かって「つながれ」「つながれ」の大合唱では、彼らは逃げ場を失ってしまいます。結果、大学ではぼっち席に座ってご飯を食べ、他者の目は気になるものの、これも「別にいいではないか」となるわけです。

中学生・高校生に見られるマスク文化

「ぼっち席」を別の側面から見たときに、よ

く似ているのが、昨今の中・高校生に見られるマスク文化です。

学校現場に行って、マスクをしている子たちにマスクをする理由を聞くと、多くの子から返ってくる答えが「安心できるから」です。この「安心できる」という言葉が、実は中・高校生を理解するときのキーワードです。

最近、授業のスタイルとして定着してきた感のあるアクティブラーニングですが、この学習形態について、マスクをしている子たちの多くが、「あれは苦手だ」と言います。自分の意見はみんなの前で言いたくない、自分の意見はあまり表に出したくないという気持ちを持った中で、マスクが他者との関係性に壁を作ってくれることを彼らなりの言葉で「安心できる」と表現しています。

授業で順番に先生に指名されて発言していく場面を想定してください。その際、マスクをしている子に対して先生が「大丈夫かな？今日はやめようか？」と指名を飛ばしてくれたことがあったそうです。

子どもたちは、「マスクをして行くと指名されない」と学習します。マスクは自己を防衛するものであり、他者との壁を作るものであり、場合によっては、自分と他者との関係性の薄さみたいなものを表現する道具ともなるのです。マスクというアイテムによって、そういう感覚が表現される実態を見逃してはいけないと思います。

友人関係を作るのが苦手だったり、学校に行くのがしんどい子たちの自己表現の１つにマスクがあるのかもしれません。たかがマスクですが、マスクの裏に隠されたなんとなくの「息苦しさ」みたいなものに気づくことが必要です。「最近、あの子マスクしているな」と思ったら、その子にはちょっと目を配ってあげてください。

少人数化

最近の若者の特徴の１つにグループの少人数化があります。小学生でも２人とか３人とかいう小グループも目立ってきたようです。

「ニコイチ」という言葉が小学生に流行しています。ニコイチは、まわりの友だちが自分から遠ざかっても、この関係だけは切らないようにしようという自己防衛が働いている場合にも使う言葉のようです。なぜなら、子どもたちはいじめを「まわす」からです。

いじめが、今週は誰の番、来週は誰の番といったようにまわって来ます。誰かとニコイチの関係を作っておくと、自分がいじめられる番のときにも、ニコイチの友だちからだけは絶対に自分は攻撃を受けない、そのかわりその子がいじめられる番になったら、少なくとも自分はその子をいじめない。そういう関係を作って、自分たちを守っている子らまでいるのが現状です。

同質化と島宇宙化

さらに、顕著な傾向として、グループ内の同質性が高くなってきたことがあります。一緒にいる子たちはよく似ています。趣味の世界で、例えば、嵐が好きなグループやAKB48が好きなグループがあるとします。最近のポイントは、この両グループの間に流行語が共有されないことです。つまりクラス全体が同じ話題で盛り上がることがありません。首都大学東京の社会学者、宮台真司氏が、これを「島宇宙化」と表現しました。昔ならなんとなくグループの間でも共有できた文化が、今はそれぞれのグループだけに特化されてしまいます。そうすると、１つのグループの中で人間関係が破綻して仮にいじめが起こったとしても、その島同士がお互いに完全に無関心な状態にあるので、子どもたちはその状況がみえていたとしても、自分たちのグループには関係ないと考えるのです。

この無関心さが強くなっていくと、グループからはじかれて、どのグループにも所属できない子は、自分のことに誰も関心を持ってくれない感覚に陥ります。「いじめられ」や不登校傾

向の強い子たちの最初のポイントです。彼らが独りでどこへ居場所を求めていくかが問題です。

図書館という理由のいらない場所

そんな時、昔なら保健室が逃げ場所の代表でした。最近では保健室にも行けない子たちが、図書館を選び始めたようです。

なぜ図書館なのでしょう。休み時間ごとに図書館に行って本を読んでいる「ふり」をしている子たちの多くは、「図書館に来るのに理由はいらないから」が本当のところのようです。保健室は、養護の先生に「どうしたの？」と理由を聞かれます。しかし、図書館では司書の先生に「どうして図書館に来たの？」とは問われません。図書館は「理由のいらない空間」なのです。

同じようなメンタルの子に見られるのですが、職員室の入口付近で、「O-157 に気を付けましょう」と書かれたポスターを、休み時間ごとに来てずっと見ている子がいたら、それも「息苦しさ」のメッセージです。彼らは先生方に声をかけて欲しい、気づいて欲しいと思っているのかもしれません。

しんどいと自分では言えない子たち

先日、元プロボクサーの世界チャンピオン、内藤大輔さんと対談する機会がありました。

内藤さんは私にこうおっしゃいました。

「原先生、いじめられてしんどい思いをしている子に、嫌なことがあったら親に言えとか、先生に言えとか、そんなメッセージを子どもたちに伝えていませんか。」その通り、私は子どもたちにそう伝えてきました。

ところが、内藤さんは、「先生、それは無理です。しんどい子は自分からしんどいって言えないからしんどいんですよ。」と。内藤さんのおっしゃる通りです。

メンタルが弱くなってきている子たちに対してどういう支援をするかを考えないと、その子たちがある日突然学校に来なくなる。来なくなってからでは遅くて、まだ学校に来れている時に、しんどい思いをしているなと感じたら、「大丈夫か？」と先生から声をかけて欲しい。これは、内藤さんご自身の中学時代の体験に基づいてのお話でした。

いじり、カーストの問題

最近の子どもたちのしんどさの背景を説明する言葉の中に、「いじり」と「スクール・カースト」の問題があります。具体的に「缶けり」を例として考えてみましょう。グループ内でのカーストが高い子が鬼をひくと、みんなが普通に隠れて、こっそり近づいて缶を蹴ろうとする。この繰り返しが缶けりです。しかし、カーストの低い子が鬼になると、途端に遊びが一変します。

カーストの低い子、気の弱い子、でも優しい子が鬼になって、「もういいかい？」と始めると、他の子は隠れずに、その子のまわりで立って見ています。「もういいよ」、近くから声がするなと思いながらおそるおそる顔をあげると、みんな隠れずにそこに立っているのです。缶のまわりにいて、誰かが缶を蹴ってまたその子が鬼になる。カーストの低い子がこうしてずっと鬼を続けさせられる。こうした「笑い」みたいなものの延長にカーストがあって、このタイプの子の「優しさ」に付け込んだ「いじり」が、いじめに発展しやすいという研究の指摘もあります。

このような子どもたちの遊びと特徴を相関させて考えていくと、われわれがしっかりと見届けなければいけない子どもたちの生活世界が見えてきます。

協働的なレポート作成にみる２つの問題

大学は、社会人として生きていく上での協働的なコンピテンシーを身につけさせる最後の機

会であると思っています。私も、授業でよく「仕掛け」るのですが、200人くらいいる自分の授業で、学生たちに何回かグループでのレポートを提出させます。

2人、3人の小さいグループの時もあれば、6人、7人の大きなグループでの作業を条件とする場合もあります。中学、高校までと違う点は、グループは私が決めないことです。

最初、学生たちは、自分たちで自発的にチームを作るのはしんどいので「先生が決めてください」とよく言いました。しかし、これをあえて仕掛けることにも意味があるのです。

自分たちでグループを作るということは、自分がどうすれば良いのかを考える機会でもあります。自分が主体的に働きかけたり、グループに入れてもらうように動かなければいけません。ここにある種のストレスがかかります。そのストレスを乗り越えさせることも実は大事なことなのです。もちろん、私が様々な点に気を配りながらですが、自分たちでグループを作らせてみると、意外に作れないものです。

問題点は、2つあります。

私は、グループの人数を告げて、学生たちの様子を観察しています。すると、まずはいわゆるリーダーシップを取れる子が立ち上がって「一緒にやろうか」と声をかけ始めます。このタイプの子がいると、グループ作りは楽です。しかし、大学では、このタイプの子が最近少なくなってきたようにも思います。

座っていれば必ず声をかけてもらえるタイプの学生たちもいます。しかし、みんながグループを決め始めているのに、ずっと席に座ったままで下を向いている学生もいます。このタイプを先生方はぜひ見逃さないでください。みんなが「一緒にやろうか」と言っている時に、下を向いていると、まわりはこの子に声をかけていいものかわからないので飛ばしてしまいます。先ほどのマスクと同じです。

この学生がこの後どうするのかを見ていると、しばらく下を向いて誰かが声をかけてくれるのを待っているようですが、ちょっと顔をあげてまわりの様子を確認した上で、「もう半分以上いないな、ダメだな」と思うと、バッグを持って講義室からスーッと出て行きます。

翌週、この学生は一人でレポートを書いてきます。私が、「今回は特別に受け取るから、次はグループで書けるようにがんばろうな」と励ますと、ニコっと笑って「ハイ」と言いますが、その次もこの学生は一人でレポートをやってきます。一度受け取ったら既成事実ができあがりますから、「原先生は一人で書いても受け取ってくれる」と思えば、グループを作ろうという努力すらしなくなります。

もう1つ。昔は出席を取る授業に行けない時は、友だちに「すまん、頼む！」と言って自分に代わって返事をしてくれるよう、頼んだこともあったと思います。代わりに、その次にその相手が「明日、頼めるか？」と言ってきたら、「いいよ。」というやりとりがありました。こちらから頼んだ時には、「今度バイト代が出たらラーメンおごるわ。」というやりとりもありました。こういう人間関係の作り方を、昔は、社会に出る前に知っていたと思います。それが良い悪いという話ではなく、世の中で生きていく時に、人との関係をしっかりと保つ方法を学んでいたのです。

最近の大学は、講義室の入口にカードセンサーがついていて、そこに学生証をかざすと音がして出席完了です。私は、入り口で10枚くらいトランプみたいに学生証を持って来て、何人分もかざす学生がいるのを、ある意味で「期待」して見ています。ところが、みんな驚くほどまじめなのです。

様々な背景、多様な価値観を理解する

価値観が多様化しています。学校に来ない子、登校を渋る子たちというのは、何かその背景に本人なりの理由があります。従来の価値観で、それはおかしい、と言ってしまうと、もう

あいつには言わないでおこう、となってしまいます。

そのように考えていくと多様な考え方に沿っていかなければいけない学校現場の中に、画一的な評価基準があることで齟齬が生じ、子どもたちの生きづらさを作っているのではないかと思っています。

つながり

大きな震災を何度も経て、人間同士のつながりは大事だ、絆は大事だとわれわれは言ってきました。しかし、つながりをあおるほど、つながる力のない子たちの行き場所がないという指摘が筑波大学の土井隆義氏の論です。

学習指導要領の改訂の大きな流れとして、アクティブラーニングによる指導法への言及があります。改訂の文脈は、おおよそ昨今の教育の流れからいっても間違っていないと思います。ところが、その学習の仕方や学びの方法に、必ずしも適応する子たちばかりではないという考えや価値観をわれわれが持っておかなければ、適応できない子たちの息苦しさを誰も理解してやれないのです。

高校生にも便所飯が

高校での「便所飯」の話は、先生方ご存じでしょうか。私は学校へ行かせていただくと最初に訪問するのが、用務員さん、技術員さんの部屋です。そこで、「トイレ掃除の時に、食事の跡、例えばおにぎりのビニールが出てくるトイレはありませんか？」と聞くと、用務員さんは「ありますよ。東側の校舎の何階の…」と教えてくれるところもあります。そのトイレを見に行くと、なんとなくそういう雰囲気があります。その後で、校長室に行き、挨拶を済ませ、生徒指導担当の主任の先生を呼んでいただいて、「高校生がトイレでお弁当を食べている実態はありませんか？」と聞くと、みなさん「見たことない」とお答えになります。先生に用務員さん、技術員さんの話を伝えても、先生方は絶対ないと思っています。あるいは、ないはずだと思っています。これも思い込みの怖さです。

学力といじめの関係

最近、ネットいじめのデータ分析を進めています。一般に、勉強ができる子たちが多いといわれる高校と、勉強が苦手といわれる多様校にわけて、それぞれの学校でネットいじめの発生率について、違いがあるかどうかをみたら、ほとんど違いがありませんでした。同じような割合でネットいじめは起こります。また学校でいじめられている子は、ネットでもいじめられる相関が高い、これが現実です。

しかし、私が『月刊高校教育』に発表した論文にある通り、（学力）上位校のネットいじめと、多様校のネットいじめは、種類が異なることがわかりました。詳しいデータはそちらでご覧いただきたいのですが、上位校では「いじり、さらし」というのが多く、ほとんどいじめている感覚がないです。この場合、キーワードは「笑い」です。本人がいないところで、誰かがその子のネタを提供して、みんなで笑うという感覚です。彼らと向き合って話をしてみると分かるのが、彼らは笑っていないと、もしくはネタを提供しないと、なんとなくやっていられない感覚のようなものがあって、誰か勉強のできる子の足を引っ張ってやろうということではなく、「あいつアホやな」とみんなで笑う、それが彼らのストレス解消のようです。

多様校は、外から見てもよくわかる、他者を攻撃する意図でネットを使っています。直接攻撃型のネットいじめが多いということです。

啓発の効果

このような現状にどう対処すれば良いのか、啓発はどの程度効果があるかどうかを測定する

実験をしました。

2013年から3年にわたって、京都のある中学校にご協力いただいて、私が学期ごとに講演・研修に行き、その効果があるかどうかのデータを提供していただきました。

結果、全て啓発効果がありました。中学生たちは、研修を通して、人間同士のつながりが大事だということに気づきます。ゆっくりじっくり人間関係作りを仕掛けていくと、効果があるのです。

その途中では、逆にネットいじめの認知件数が増えます。なぜかというと、嫌なことがあったら友だちに「嫌だ」と言うとか、親や先生に今日こんな事があった、と声を出しやすくなるからです。人間関係が近くなってくると言いやすくなるという実証データです。

認知件数が増えても焦ることはありません。軽微な状態での認知が増えるので、先生方も早い段階で対応することが可能になります。

こうすることによって、重篤ないじめや不登校になってしまう前に、その子たちに対して適切な支援ができる可能性があります。人間関係づくりを仕掛けることは、教育学的にも重要だということがわかるデータが提示されました。

若者たちに必要なつながりとは

若者たちにはどのような支援が必要でしょうか。つながりは必要だとわかっていても、最近の子はWIN-WINの関係を作ることが下手です。しかし、先ほどのレポートのグループを作る際に、下を向いていた子に、われわれは「下を向いてたらだめだ」ということを今まで伝えてきたでしょうか。つまり小学校の頃から、コミュニケーション力がないと自分自身の自己価値を下げてしまうタイプの子たちは、「顔をあげるだけで、全然違うぞ」ということを、誰かに教えてもらったかというと、誰にも教えてもらっていないのです。「つながれ」と言いながら、つながり方を教えてこなかった、われわれにも責任があるのではないかと思います。

だからこそ、今日、私が先生方にお伝えしたいメッセージは、彼らをどう支援するかという眼をわれわれが持つかどうかだけでも全然違うということです。そして、その子につながり方を教えることです。具体的に1つでも2つでも示すことです。そして、その子たちのまわりに、つながる力を持った教員や大人たちをできるだけ配置して支援することです。自分が所属しているところの人間関係だけは大事にするけれども、知らない人間とはふれあいたくないという関係は、高校生が最も得意とする人間関係の作り方です。

これまで、基本的に、学校に行きづらい、学校がしんどい、人間関係を作りにくい子たちには、個別支援がよいと考えられてきました。これは正解です。でも一方で、個別支援に慣れてしまうと大きなグループで活動できません。少しずつストレスをかけながら、大きな集団へ近づくトライが必要です。大きな集団の中で自分自身を表現する前に、まず小さな集団から少しずつ大きな集団を作れるようにする、そのためには小さな集団同士「橋渡し」ができる力を持った人間に育てることです。

そのように、大きな集団の持っている力や大きな集団の作り方について教えていくような学校行事も含めた取組みが必要かもしれません。息苦しさを感じている子どもたちへの「支援」の方向性として、その力をバランスよくつけていくことを目指す、を今日の話の着地点としたいと思います。

ご清聴、ありがとうございました。